

# 大学での教員－学生関係の研究

## ～講義時間以外での交流のあり方について～

久木山 健 一

### 問題と目的

少子化、大学全入時代、大学進学率の向上などにより、大学に入学する学生の資質にも変化がみられ、大学に要求される役割も大きな変化が生じている。例えば、これまでの大学での「放任主義」的な指導への批判が高まり、授業時間の確保や指導内容の改善、学習成果の質保障などへの要求が強くなったことなどが挙げられる。こうした要求に対してこれまで行われて来た活動として最初に思いつかれるのはFaculty Development（以下、FDとする）活動ではないだろうか。

文部科学省の中央教育審議会による平成17年の答申によると、FDとは、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。」とされている。また、絹川・館（2004）では、FD活動の具体例として、(1)大学の理念・目標を理解するワークショップ、(2)ベテラン教員による新任教員への指導、(3)教員の教育技法（学習理論、授業法、討論法、学業評価法、教育機器利用法、メディア・リテラシーの習熟）を改善するための支援プログラム、(4)カリキュラム開発、(5)学習支援（履修指導）システムの開発、(6)教育制度の理解（学校教育法、大学設置基準、学則、履修規則、単位制度）、(7)アセスメント（学生による授業評価、同僚教員による教授法評価、教員の諸活動の定期的評価）、(8)教育優秀教員の表彰、(9)教員の研究支援、(10)研究と教員の調和を図るシステムと学内組織の構築の研究、(11)大学の管理運営と教授会権限の関係についての理解、(12)大学教員の倫理規程と社会的責任の周知、(13)自己点検・評価活動とその活用が挙げられている。

上記のFD活動の内容を概観すると、その活動の関心の大半が、講義などの「授業の中での活動」に偏っており、また「上手に学問を学生に教えるために必要とされる教員の資質向上のための活動」に偏っているといえるのではないだろうか。

この現状について、学習指導と生徒指導という用語を用いて説明すると、大学教育

では学習指導についてはFD研究などで多くの検討がなされているが、生徒指導的な活動についての研究は少ないと言えるのではないだろうか (Fig. 1)。

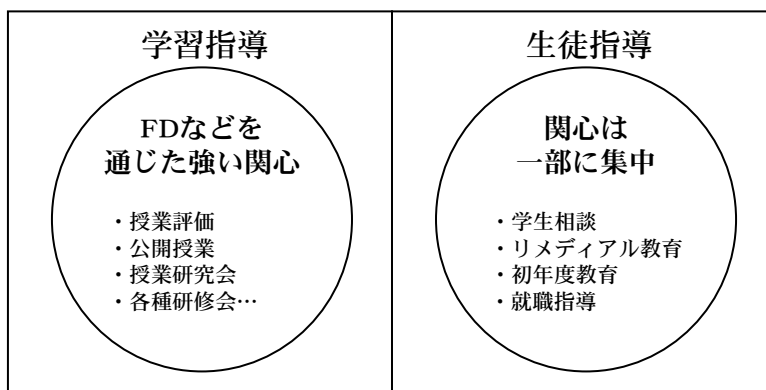


Fig.1 大学教育に関する研究の関心の分布 (学習指導と生徒指導の関係)

もちろん、大学における生徒指導的な活動も多く存在している。本学を例にとると、学生相談室の設置による心の問題を有する学生への対応、基礎教育センターによる学生への対応、学力コンテストなどを通じたりメディアル教育など多くの活動が実践されている。しかし、それらは生徒指導の内の教育相談的な位置づけになっており、個別対応が有効かつ求められる学生への対応が主眼となった活動であると考えられる (Fig. 2)。

また、新入学生を対象としたオリエンテーションや、就職活動を控えた学生への進路指導等も生徒指導的活動と考えられる。しかし、そうした入学時および卒業時以外の生徒指導的活動については、各教員の自主的な活動によることが多く、大学として

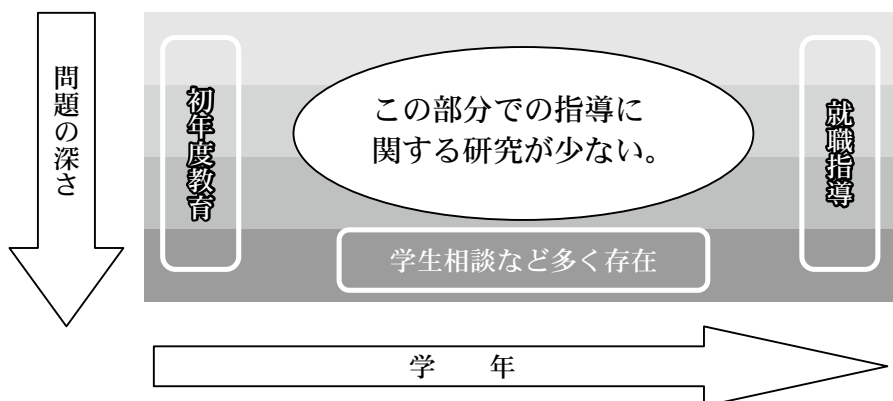


Fig.2 大学での生徒指導的活動の問題の深さおよび学年での分布

の組織的かつ体系的な取り組みはあまりみられないのが現状ではないだろうか (Fig. 2)。

生徒指導から、教育相談、初年度教育、進路指導を除いた、日々の一般的なレベルの生徒指導的活動の実践について本学の例に挙げてみると、クラス担任制の導入、オフィスアワーの設定、さまざまな交流イベントの開催など、多くの活動が試みられているのは事実である。しかし、FDに関する研究が非常に多くみられ、かつ科学的な視点からまとめられているのに対し、授業外での教員と学生との関係性についての研究は乏しい。そのため教員は各自で模索をするだけに留まり、模索の中で得た知見を共有する活動や研究は乏しいと考えられる。

このような現状において、「どのような関係性になることが多いのか?」、「どのような関係性を目標としたら良いのか?」、「学生はどのような関係性を求めているのか?」などについて探索的に検討するために、本研究ではまず大学の授業外での教員－学生関係のありかたについて、学生が望む形態を中心に検討することを第一の目的とする。

ただし、杉本 (2014) では、教育・支援を手厚くしすぎることで、学生の受動的な態度形成につながる可能性もあることが指摘されている。確かに、大学において関係性の対象が教員にのみ留まり、友人との関係の中でのアイデンティティ確立などが阻害されてしまっている学生が存在するのもまた事実である。また、教員による過度の配慮のため、学生が自身の力で自身の将来を切り開いていく力が身につかず、そのため就職活動などで外部の社会の実際に打ち負かされ、進路決定から逃げ出す形になる学生の存在も考えられる。

そのため、本研究の第2の目的として、大学の教員－学生関係の形態とアイデンティティ、キャリア成熟との関係性を検討することも挙げる。

## 方法

### 1. 質問紙

- (1) 大学の教員－学生関係尺度：大学の教員と学生との関係性について、学生が教員にどのようなことを希望するかという視点から作成された30項目を使用した (5件法)。
- (2) アイデンティティ：日本の大学生のアイデンティティの測定を目的として作成された下山 (1992) の尺度20項目を使用した (4件法)。
- (3) キャリア成熟：坂柳 (1999) の成人キャリア成熟尺度を、人生キャリアを測定

出来るように教示文の語句を変更して使用した（5件法）。

- (4) フェイス項目：学年、性別、居住形態、友人関係の満足度、メールやSNSの利用頻度、部活動などの参加の有無と満足度などについて回答を求めた。
2. 調査対象：大学生252名。男性177名（1年115名、2年37名、3年11名、4年13名、その他1名）、女性75名（1年60名、2年7名、3年5名、4年2名、その他1名）。
3. 調査時期：2014年1月

## 結果と考察

### 1. 尺度構成

下山（1992）のアイデンティティ尺度について、原典にしたがって $\alpha$ 係数を算出したところ、アイデンティティの基礎で.83、アイデンティティの確立で.82となり、内的整合性が確認された。坂柳（1999）の成人キャリア成熟尺度について、原典にしたがって $\alpha$ 係数を算出したところ、関心性で.78、自律性で.69、計画性で.79となり、自律性で低い値が出たもののおおよその内的整合性が確認された。

### 2. 大学の教員－学生関係尺度の因子分析

大学の教員－学生関係尺度30項目をもちいて、主成分解を初期解とし、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上の基準より因子数を6とし、再度因子分析を行った（Table 1）。

第1因子には「なるべく教員と一緒に長い時間を過ごしたい。」「教員とプライベートを含めた関係性を作っていきたい。」などの項目の負荷が高く、「個別認知志向」と命名された。

第2因子には、「講義の中で100%分かるような工夫を教員にはして欲しい。」「教員には分かるまでしっかり説明してほしい。」などの項目の負荷が高く、「依存志向」と命名された。

第3因子には、「分からないことについては教員より友だちなどに相談したい。」「講義より友人との交流などから学んでいきたい。」などの項目の負荷が高く、「交友重視志向」と命名された。

第4因子には、「事情のある欠席や遅刻などへの対応を教員にはしっかりして欲しい。」「欠席時の配付物やノート確保の対応が悪い教員に改善を望みたい。」などの項目の負荷が高く、「個別対応志向」と命名された。

第5因子には、「教員と仲の良い関係を維持したい。」「講義以外で教員との交流を

とるのが好きである。」などの項目の負荷が高く、「一般的交流志向」と命名された。

第6因子には、「分からないことは教員に頼らず自分で解決したい。」「教員から学ぶよりかは自分で学ぶ姿勢を大切にしたい。」などの項目の負荷が高く、「独立志向」と命名された。

Table 1 教員-学生関係尺度の因子分析結果

	1	2	3	4	5	6
18. なるべく教員と一緒に長い時間を過ごしたい。	.77	-.03	-.12	-.21	.03	.07
23. 教員とプライベートを含めた関係性を作っていきたい。	.73	-.13	.00	-.05	.17	-.01
15. 教員に自分（学生）のことを気にかけて欲しい。	.61	.20	-.05	.11	.19	.03
30. 教員にもっと自分（学生）のことを理解して欲しい。	.57	.25	.12	.09	.10	.01
10. 教員に自分（学生）を大事にあつかって欲しい。	.44	.17	.09	.34	.16	-.04
5. 教員に自分（学生）に対する興味を持ってもらいたい。	.42	.06	-.03	.35	.19	.04
3. 教員は学生指導にもっと責任を持って欲しい。	.38	.07	.05	.38	-.21	.09
22. 講義の中で100%分かるような工夫を教員にはして欲しい。	.17	.92	.01	-.34	-.23	-.07
21. 教員には分かるまでしっかり説明してほしい。	.06	.82	-.09	-.15	-.06	-.07
11. 学生が成長できるような工夫を教員にして欲しい。	.05	.61	.14	.08	.11	-.03
17. 自分がより成長できるような講義を教員にして欲しい。	-.23	.57	.01	-.07	.44	.15
26. 授業で分からないことについて教員はすぐに相談に乗って欲しい。	.22	.48	-.33	.17	.09	-.06
13. 好きな学問の分野でも教員の講義が分かりにくいと受けたくない。	-.16	.41	.32	.18	-.09	.01
7. 質問に行ってもその場で対応してくれない教員は望ましくない。	-.32	.36	.00	.33	.23	.07
25. 分からないことについては教員より友だちなどに相談したい。	-.01	.17	.84	-.25	.07	.08
29. 講義より友人との交流などから学んでいきたい。	.00	-.04	.74	-.12	.25	.04
6. 分からないことについては教員より先輩などに相談したい。	-.02	-.18	.68	.07	-.03	-.16
1. 事情のある欠席や遅刻などへの対応を教員にはしっかりして欲しい。	.02	-.21	-.17	.89	-.07	.03
12. 欠席時の配付物やノート確保の対応が悪い教員に改善を望みたい。	.02	.41	-.02	.44	-.15	.16
8. 学生のレベルにあわない高度な講義をする教員は好きではない。	-.07	.39	-.02	.40	-.05	-.29
16. 教員と仲の良い関係を維持したい。	.23	.07	.06	-.21	.73	.10
9. 講義以外で教員との交流をとるのが好きである。	.38	-.23	.08	.01	.66	.05
2. 教員と学生との密接な関係があると良いと思う。	.22	-.12	.18	.07	.58	-.24
28. 分からないことは教員に頼らず自分で解決したい。	.17	-.01	.11	-.11	-.16	.80
27. 教員から学ぶよりかは自分で学ぶ姿勢を大切にしたい。	-.04	-.20	-.10	.18	.18	.64
20. 少々分かりにくくても興味のある分野の講義を受けたい。	-.06	.11	-.20	-.12	.27	.51
14. 教員に頼ったりすることはなるべく避けたい。	-.02	-.09	.16	.32	-.30	.50
成分相関行列						
	1	2	3	4	5	
2	.26					
3	.14	.14				
4	.22	.49	.29			
5	.27	.28	-.10	.24		
6	-.04	.07	.03	.09	.10	

### 3. 大学の教員－学生関係の形態とアイデンティティ、キャリア成熟との関係

大学の教員－学生関係尺度の因子分析結果より、6因子それぞれの因子得点を算出し、アイデンティティの基礎、アイデンティティの確立、キャリア（関心性）、キャリア（自律性）、キャリア（計画性）との相関係数を求めた（Table 2）。

Table 2 大学の教員－学生関係の形態とアイデンティティ、  
キャリア成熟各得点間の相関係数

	個別認知 志向	依存志向	交友重視 志向	個別対応 志向	一般的交 流志向	独立志向
アイデンティティ基礎	-.06	-.15 *	.00	-.13 *	-.14 *	-.05
アイデンティティ確立	.14 *	.25 **	-.07	.10	.18 **	.15 *
キャリア（関心性）	.04	.07	-.15 *	.01	.30 **	.09
キャリア（自律性）	-.12	.05	-.15 *	-.02	.20 **	.18 **
キャリア（計画性）	-.06	.04	-.14 *	-.02	.09	.12

\*... $p < .05$  \*\*... $p < .01$

アイデンティティの基礎に関しては、弱いながらも依存志向、個別対応志向、一般的交流志向との負の相関がみられた。このことより、アイデンティティの基礎が出来ていない者は、自分に対しての全般的な不全感があるため、教員との交流も回避することが考えられた。こうした学生こそ、教員との交流がプラスに働く可能性があるものの、アイデンティティの基礎が出来ないがゆえに教員との関係を避け、教員をサポート源として利用出来ていない現状を反映していることも考えられる。

アイデンティティの確立に関しては、依存志向、一般的交流志向、独立志向などとの正の相関がみられた。全般的に自分に対しての確立感があるため、教員からの独立した存在でありつつも、一般的な交流や独立を確保した上での積極的な依存などで教員との積極的な接触を行う学生像が考えられる。

キャリア成熟尺度に関しては、関心性、自律性、計画性のいずれの得点も交友重視志向との負の相関がみられた。このことより、キャリアなどに関しては友人を頼ることは少ないとの解釈が可能であるといえよう。学習などに関しては、友人との議論や教えあいなどが有効に働くことが多いが、キャリアに関しては学生同士が共に初体験の存在であることより、学生同士での解決ではなく、教員やキャリアセンターなどの利用を優先させることが考えられる。

また、キャリア成熟に関しては、関心性が一般的交流と正の相関を持ち、自律性が一般的交流と独立志向との正の相関をしめし、依存的な関係などとは関連をしめさないことが確認された。これらのことより、キャリア面での成熟がなされるとともに、教員への依存的な関係から脱却し、一般的な対等な関係性を維持しつつ、特に自律性が高い者においては独立的な立場も有することが出来る様になる、という発達的な変化が存在することも考えられた。

#### 4. 大学の教員－学生関係の形態と大学以前の教員との関係性の違いの主観的認知、大学生生活満足、大学の友人関係満足との関連の検討

大学の教員－学生関係尺度の因子分析結果より、6因子それぞれの因子得点を算出し、大学以前の教員との関係性の違いの主観的認知、大学生生活満足、大学の友人関係満足との相関係数を求めた (Table 3)。

Table 3 大学の教員－学生関係の形態と大学以前の教員との関係性の違いの主観的認知、大学生生活満足、大学の友人関係満足との相関係数

	個別認知 志向	依存志向	交友重視 志向	個別対応 志向	一般的交 流志向	独立志向
大学以前との違いの認知	-.13 *	.17 **	.13 *	.11	-.03	-.08
大学生生活満足	.01	.01	.06	-.03	.15 *	.09
大学の友人関係満足	.03	-.02	.08	.00	.07	.02

\*... $p < .05$  \*\*... $p < .01$

その結果、大学以前の教員との関係性の違いの主観的認知とは、依存志向、交友重視志向との間に正の相関がみられ、個別認知志向との間に負の相関がみられた。これらのことより、大学の教員から名前を覚えてもらうなどの個別認知を受けていないと感じることが多い学生や、教員への依存を望むことが多い学生は、中高生時代の教員との違いを感じる人が多いことがしめされた。確かに、中高生の場合は学級担任が存在し、担任以外の教員も生徒の名前を覚えているなど、自身が個別に認知されているという実感を生徒が持つことは容易であるのに対し、基本的には講義のみの関係に留まりやすい大学の関係では、個別認知をされることは少なく、そのため依存がしにくいことが考えられる。そうしたことより、教員への関係性ではなく友人への関係性を望むという流れの存在も考えられる。

大学生生活満足に関しては、一般的交流志向との間の正の相関がみられた。このこと

より、大学生活に満足している学生においては、個別認知や個別対応、依存的な関係性ではなく、教員と一般的な関係性を持つとすることが考えられる。

大学の友人関係満足とは、いずれの因子とも有意な相関はみられなかった。このことは、大学での友人関係の満足と、教員との関係の間は比較的独立していることを示唆する結果であるとも考えられる。

最後に、本研究の結果はいずれも非常に弱い相関関係のものであり、また因子得点を使用したことで因子の持つ意味の明確さが弱いという大きな欠点が存在する。そのため、本研究の結果は、今後の検討の参考にする程度にとどめ、過度の解釈は控えることが求められる。

ただし、本研究で得られた結果は、大学での教員－学生関係が学生のアイデンティティやキャリア成熟と関連があることを確認するものであり、かつ、現在の大学での教員－学生関係において足りないものなどを示唆するものでもあったと考えられるため、今後のより精密な検討が求められる。

## 文献

- 絹川正吉・舘 昭（編著）2004 学士課程教育の改革，東信堂。
- 坂柳恒夫 1999 成人キャリア成熟尺度（ACMS）の信頼性と妥当性の検討．愛知教育大学研究報告，48，115-122.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究 —アイデンティティの発達との関連で—．教育心理学研究，40，121-129.
- 杉本英晴・五十嵐素子 2014 不適応学生をどのように支援できるか —自律性を育む教育・支援の可能性—．日本発達心理学会第25回大会論文集，SS1-1.
- 文部科学省中央教育審議会 2005 我が国の高等教育の将来像（答申）．（平成17年1月28日）。